

いたちかわらばん

通刊38号 鮰川・独川 / 川原番・瓦版 07 夏号



【版画 宗森英夫】

上流から見た天神橋

平成の天神橋デビュー

一九八六年（昭和六一年）に戸塚区から分区した栄区は一時期人口が減りましたが、平成一三年を境に再び増加に転じました。本郷台や大船駅周辺の変化と共に区の中心部である天神橋の辺りも道路の拡幅に伴って大きく変化しています。

昭和四〇年代には集中豪雨で橋の上まで水があふれて周辺が浸水し、河川改修が急務になり昭和五年に造られた天神橋も数年がかりで昭和六三年に架け替えられました。

交通量の増加によって渋滞が激化し、道路の拡幅工事が進んでいます。それにあわせて天神橋も拡幅改修され、平成一七年度には完成しました。今はまだ全部は使われてはいませんが、前後の道路の完成を待つ現在の片側一車線から片側二車線の四車線となります。その時期は来年度中とのことです。

商店街のアーケードがなくなり、横断歩道も変わり、いたち川の川幅よりもずっと広くなった道路を支える天神橋！ 広々と明るい景観になりました。橋の歩道部にはバルコニーもあり、バス停もあり、下を流れるいたち川には自然豊かな水辺に魚が泳ぎ、橋の隣りには昭和五年に造られた古い天神橋の記念の石柱が四本並んだ植え込みもあって・・・

自然との調和を大切に美しい景観を創り、生命を守り育てる活動を天神橋はずっと見守り続けるでしょう。

（うぐいす）

瀬上沢とホタルを守る会



2007年2月に設立した新しい水辺愛護会の紹介です。会として立ち上げたばかりですが、活動開始はその3年前に遡ります。2004年に「蛍の里さかえ事業」として、栄区が区民からボランティアを公募し、ホタルを守る活動を開始しました。栄区の自主事業「栄区ほたるボランティア」活動は3年で終了することとなり、この活動を通して集まった人たちが、瀬上沢とホタルを守る活動を自主的に続けようと、有志による水辺愛護会を設立しました。

メンバーは、会長の佐々木先生（鶴見大学生物学研究室）を始め、若手は小学生、中学生から大人まで、老若男女、約30名の正会員と若干名の賛助会員で構成されています。

瀬上沢の環境を良好に保ち、ホタルを初めとする生き物等の生息に快適な環境を維持し、水辺と触れ合い楽しむことができるように、美化活動を実施し、さらに、人が水辺にすむ生き物と共存することの重要性を理解し、水辺を愛することを伝え広めることを目的として、活動しています。活動日は、毎月第三日曜日の10:00からですが、ホタル幼虫が上陸するころから飛翔時期は随時夜間も活動します。

具体的な主な活動内容を紹介しますと、

- みんなの池（旧トンボ池、池の下広場と田んぼの間の小さな池）の周りのヘイケボタルが住む環境づくり。池堀り（秋～冬）、草刈（通年）、水路の管理・整備（主に夏～春）、水の量の管理（通年）など。ここ数年は池がすぐに埋まってしまうので、毎年定期的な池の泥あげを検討しています。
- 瀬上沢のゲンジボタルがすむための環境整備。川の掃除、川を覆う草木の伐採など。さらに水質の調査と維持、カワニナの生態調査なども計画中です。
- ホタル保護活動。杭うちと看板たて（入ってはいけない箇所の明示、4月）、発生数調査（春の幼虫上陸～夏の成虫の飛翔）、観察、ホタル見物の人たちへの啓蒙活動（エチケットを書いたウチワの作成、配布、エ

チケットの呼びかけ、紙芝居による啓蒙、ホタルの生態紹介など、5～7月）等です。

- 自然と親しむ活動。魚、貝、昆虫、植物を観察し、触れ合う活動をしています。
- 市環境創造局から水辺愛護会として委託を受けた、舞岡上郷線下～瀬上池下までの、毎月の清掃と年2回の草刈りを行っていきます。特に上郷高校下は粗大ゴミの不法投棄が多く、会員が発見次第撤去するように努めています。
- さらに今年から全国ホタル研究会にも入会し調査・研究結果を研究会に報告するという学術的な活動も行っています。

以上の活動をより実りあるものにするためには、地域に根ざした活動にすることが必須であると感じています。地元の学校や自治会、近隣の他の愛護会、住民の皆さんと会話したり、巻き込んで協働していきたいと考えています。（高橋信一）

7月・8月は「いたち川月間」です。

栄区では、いたち川の魅力をもっともっと高めながら、川を活かしたまちづくりを進めるため、7月・8月を「いたち川月間」として、川周辺で行われるイベントなどをPRしていきます。



★実施されるイベント

- ・いたち川まつり（7/7（土））13時～
場所：長谷戸子どもの遊び場
- ・いたち川大そうじ（7/26（木））10時～
場所：大いたち橋・小いたち橋広場
- ・第17回いたち川いかだまつり（8/19（日））10時～
場所：大いたち橋・小いたち橋広場
- ・水辺とトンボの大作戦（8/25（土））10時～
場所（集合場所）：瀬上沢（上郷高校正門前）

また、期間中は、きれいな水辺を守るため、清掃などの保全活動を行っている水辺愛護会の活動に参加できます。詳細は、栄区ホームページや、広報よこはま栄区版7月号特集記事をご覧ください。

発行年月
2007年6月

通刊38号

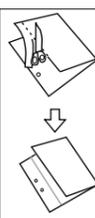
発行：独川IOTASUKE隊（いたちがわおたすけたい）

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係
栄土木事務所下水道・公園係

〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260
〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



飯島川～飯島市民の森方面

我々は、既に昨年の1月以来3度にわたる源流探査を終え、更にその後晩秋から初春に掛けて2度にわたって分水嶺探査を行ってきた。川の源流を探り、川の分水嶺を訪ねる・・・OTASUKE 隊の行動は首尾一貫して物の本質追求の基本に忠実であると言えなくもない。今回はそれらの最終回を飾るレポートである。(が、決して総集編ではない。)

分水嶺とは、雨水が異なる方向に流れる境界のことで、山岳地帯では山の稜線が境界となるので嶺の字が使われる。分水嶺と言えば真っ先に思い出す山がある。甲武信岳(こぶしだけ)である。深田久弥の定めた日本百名山の一つで標高は2,460mあり奥秩父を代表する山だ。この山は、山梨・埼玉・長野3県の県境にあり甲州、武州、信州の頭文字をとって命名されており、千曲川・荒川・笛吹川の三つの川の源流が出ている山として名高い。そして分水嶺の中でも分かれた水が異なる海域に流れる「大分水嶺」の代表でもある。

長野県で生まれた千曲川は、やがて新潟県に入って信濃川と名を変えて、新潟市から日本海に注ぐ、長さ367kmを誇る日本一の大河である。

荒川は、埼玉県荒川村を通過して東へ流れ、秩父往環道に沿って走り、長瀬を経て大東京を貫流して東京湾に注ぐ。

笛吹川は、南流して、市川大門の富士川大橋の下で釜無川と合流して富士川と名を変え、静岡県富士川町から駿河湾に出て太平洋に注ぐ。

さて、3月10日の朝、本郷台駅前に集まった我が探査隊は総勢9人で、内訳はOTASUKE 隊員8人、一般参加者1人であった。計画では、駅前を発って飯島川の水源となる飯島市民の森より旧豊田高校脇を流れる水路に沿って進み、いたち川橋で飯島方面からの流入口を確認する。次いで、川沿いに上流に向かい海里橋で公田方面を水源とする椎郷堀を探索しながら県道原宿六浦線を横断して公田小学校方面に向かい、荒井沢中谷公園から階段を登って富士講の石碑を見学する。林の中を散策し

ながら荒井沢市民の森・皆城山で昼食にする、というものであった。出発地点から飯島市民の森までは「すずかけの道」と名付けられた緩やかな坂道を経て街中を北へ往く。町名を見ると小菅ヶ谷二丁目とある。すずかけは英名プラタナスのことである。ところが、この道に植わっている木はプラタナスに似てはいるもののプラタナスではなくてモミジバフウ(別名、アメリカフウ)なのだと言う。モミジバフウも集合果は球形ですずかけを懸けるのですずかけの道で間違いではないのだが、両者のこまごまとした違いについて路上講義が始まる。毎回思うのだがOTASUKE 隊メンバーの博識振りは凄い。花鳥草木・・・このメンバーに掛かってはどんなものとして知らないものは無い。さながら博物館に居るようであり、一冊の本が書けるようでもある。

ちなみに、道々どんな動植物が話題に挙がったか文尾に羅列しておくので眺めてみて欲しい。途中、本郷台中央公園交差点で進行方向と直交する道は本郷台一、二丁目側と飯島町側との分水界だそうだ。

出発して40分後に飯島市民の森入口に着いた。ここ飯島市民の森は35年前に民地を公園にした第1号で、地主は3人だったそうだ。飯島市民の森愛護会と書かれた木柱がきちんと据えられていて、階段を交えた坂道を50mほど上ると桜ヶ丘広場に着く、ここが森の頂上のような。ヒサカキや大島桜の大樹が立ち、イヌシデの芽吹きが見られ、黄色いジシバリの花やオニタビラコが地面を飾っている。

この山頂は分水嶺にはならず、どの方向に降った雨水もいたち川には流れずに柏尾川に流れるという。長谷戸休憩所に向かって鬱蒼とした階段の散策道を下ると、小さな広場を通りせせらぎ緑道に出る。山裾のせせらぎは水をポンプアップして、鈍いモーターの回転音が聞こえる。水は少し臭い匂いがするので“カワニナは棲めないんじゃない?”という心配の声があがったが水底を観察したらカワニナの跡を認めることが出来た。

飯島市民の森を後にして、開渠になったり暗渠になったりする飯島川に沿っていたち川に向かう。東南側にはこんもりとカブト山があるのだが横目に見て歩く。水の流れはチョロチョロだが濁りが無く澄んでいて何となくほっとする。

いたち川橋に到達したのは11時過ぎ、ここまでチョロチョロとした流れしか見ていなかったのが柏尾川に流れ込む直前のいたち川が川幅も立派な大河に見えた。暗渠の出口を見て、飯島川がめでたくいたち川に合流したことを確認して飯島方面の水流に別れを告げた。(以下、次号へ続く)

話題に挙がった動植物

(アンダーラインは、当日見たり手にしたりしたものを示す)

<木>スズカケ(プラタナス)、モミジバフウ(アメリカフウ)、銀杏、コナラ、ヒサカキ、大島桜、黒松、カリン、トサミズギ、マンサク
<草花>ミモザ、キブシ、ヒメオドリコソウ、ハルノゲシ、ホトケノザ、ウイスカグラ、イヌシデ、スミレ、カントウタンポポ、ジシバリ、オニタビラコ(「鬼田平子」と書く)、ツルカノコソウ、ウコギ、オオイヌノフグリ、クレソン、ヒメウズ、ハナニラ、オキザリス、ハクモクレン、コブシ、タチツボスミレ、キュウリ草
<生物>ボラ、カワセミ、アカミミガメ、アオサギ、リス、イノシシ、カラス、カワニナ、

(ピンテール)



私たちの会は青葉区長津田の近くで、平成一四年一月に結成しました。小川や岸边には、絶滅危惧種のホトケドジョウやカワニナ、サワガニ、ヘイケボタル、ゲンジボタルも生息し、植物では、ヨゴレネコノメソウ、アブラチャン、サルナシ等が自生しています。この素晴らしい自然環境を守っていくことが私たちの目的であり課題なのです。二〇〇四年、隣接する都市再生機構の斜面地に地下式マンション建設の話が持ち上がりました。この計画が実施されると小川の環境は壊滅状態になるのではないかと考え、他の組織や愛護会と連携し反対運動を展開してきました。二〇〇六年一〇月に計画は中止され、その六千五百平方メートルは横浜市に無償譲渡されました。平地部も戸建て住宅に変更され、小川の自然は守られました。私たち愛護会活動は、奈良の丘小学校で、この小川を訪れる小鳥などの生物や植物をスライドやパネルで紹介し、自然環境のすばらしさを伝え、子供たちと学習しながら交流しています。

愛護会は定期的な清掃活動はもちろん、草刈や池の補修、しゅんせつなど土木事務所の協力を得て行っています。川のフォーラムや植樹祭のイベントには地域の人々にも参加を呼びかけ環境保全の輪を広げる努力をしています。会員は無理をしないで楽しみながら自然の中でボランティア活動に汗を流すことに大きな喜びを感じています。(高尾桂子)

● いたち川周辺で見られる生き物 繁殖力の強いタイワンリス

タイワンリスは名前の通り台湾原産で、一九三〇年頃ペットとして日本に持ち込まれたものが野生化して、本州、九州の太平洋側に局地的に分布を広げています。この近辺では鎌倉市から周辺地域へ広がり、横浜市南部でも樹皮の食害が拡大しています。初めは、鎌倉市に隣接する栄区や金沢区に限られていましたが、現在では戸塚区の舞岡公園や港南区・磯子区でも被害が報告されています。円海山周辺では、ケヤキやエノキ、ミズキなどの枝や幹の樹皮が丸ごとほがされ、真っ白な木肌をさらした無残な姿が目立ちます。いたち川上流部では、水を飲み、河川敷に出てくることも珍しくありません。

ネズミ目リス科の動物で、尾を含めた体長は四〇センチ前後、体重は約三六〇グラム。背中に黒と黄土色の霜降り模様があるのが特徴です。繁殖期にはよく鳴き交わし、泣き声は「ガツ」「クキ」「キキ」「キキキキ」「ワンワン」など多種多様な音声があります。猫、ヘビ、カラス、トビなどが接近すると警戒音を出して仲間伝えます。乳頭は2対と少なく、一度に生まれる子も2頭までで少なく生んでうまく育てるタイプです。

木のまたに、枝や枯葉を集めて大きな丸い巣を作り、樹上で生活します。昼行性で、秋の採食期には地上にすることが多く、果実やドングリなどの木の実を好みます。なかなかすばしっこく、電線を伝って移動するのもお手の物だし、垂直な所でも、頭を下にして降りることもできます。(いもの)